

〈原著〉

商店街の空き店舗を活用した 「子どもの居場所づくり」事業についての考察

隈元晴子（藤女子大学 人間生活学部 食物栄養学科）

地域社会のつながりの希薄化や家族のあり方の多様性などが、個人や家族を孤立させ、健康状態の悪化や孤食、虐待、孤独死などのさまざまな問題をもたらしている。それらを解決するカギとして、家族や地域における「人と人との絆」の再構築が求められており、地域コミュニティの形成や促進の主体として商店街への期待が高まっている。本論文では、商店街振興組合と大学生、NPO法人などが取り組んできたコミュニティカフェを拠点とする「子どもの居場所づくり」事業について、地域における活動の意義や役割を再検討することを目的として、2013年からの実践活動を振り返ることにした。

コミュニティカフェの運営は、支援者や地域住民との間に信頼関係が構築され、商店街からの人的および経済的サポートがあることが持続可能性と安定性をもたらしている。そして、この活動が「子どもたちの問題」に目を向けた事業であることから、新たなつながりの拡がりを見せている。子どもたちへの支援を行っている大学生やNPOの活動が、より多くの人々の関心や支援を引き寄せており、今後の事業展開の方向性を示唆している。

キーワード：商店街、子どもの貧困、ひとり親家庭、共食、コミュニティカフェ

1. はじめに

商店街とは地域において、個々の事業者が相互扶助を行うことを目的として組織化された集合体のことで、住宅街とは明確に識別できる空間を構成し、共同経済事業（イベントなど）や環境整備事業（アーケードや街路灯の設置など）を行う組織のことである¹⁾。これまでに商店街は、利用者に対してさまざまなサービスを提供するというかたちで個店集積のメリットを活かしてきたが、そのほかにも地域の魅力や賑わいの発信地点として、あるいは防犯・防災、環境美化、除雪などの社会活動を通じてまちづくりの中心として各地に存在してきた²⁾。さらには少子高齢化の現状をふまえ、子育て支援や高齢者福祉に対する役割や、2011年に発生した東日本大震災の経験から、住民同士あるいは住民と地域といった「絆」や、安心安全を求める傾向が一段と強くなり、防災等の対策についての期待も高まっている³⁾。

商店街の公共的役割として、「地域コミュニティの形成・促進」に対する自治体と住民からの期待はそれぞれ73.3%、61.2%と大きい一方で、商店街としての取

り組み意識は41.6%とそれらを下回っている現状が報告されている³⁾、しかし、商店街実態調査報告書によると、商店街の景況は厳しく、「繁栄している」「繁栄の兆しがある」を合わせて3.3%であるのと比べ、「衰退している（43.2%）」「衰退の恐れがある（33.0%）」と危機感を覚えている商店街が多数を占めていることから⁴⁾、自治体や住民の高まる期待に応えるのが容易ではない現状にある。

このような背景のなか、筆者の研究室では2013年度より、札幌市北区にある麻生商店街振興組合（以下、商店街）との協働で、商店街の空き店舗を活用した地域住民とのつながりの拠点となるコミュニティカフェ「麻生キッチンリあん」（以下、「リあん」）の運営に携わってきた。この事業は「地域住民の交流やふれあいの場を提供するコミュニティカフェ」としての側面のほかに、このスペースを介し、1）ひとり親家庭の学習支援を行っている市民団体であるNPO法人Kacotam（以下、カコタム）や障害者の就労サポートを行う市民団体であるNPO法人ぱすとらる（以下、ぱすとらる）など、社会活動を行う団体との関係性を通じ、直接的・間接的に社会貢献活動の支援を行う「社

会貢献活動への支援者としての側面」、2) コミュニティカフェの運営やカコタムでの学習支援、食支援を行うにあたり、大学生に主体性を与え、さまざまな後方支援を行う「大学生の主体的な関わりを支援する側面」、3) このスペースに集う地域住民などの利用者との関係性のみならず、このスペースを運営する者同士のつながりづくりを構築する「多様なつながりの形成」の3つの特徴を有している。

以上の3点をふまえ、本稿では「りあん」を開店してから3年間を振り返りながら、地域社会におけるこの事業の意義や役割について再検討することを目的とし、商店街の空き店舗を活用した商学連携事業を通じて得られた、人と人との絆づくりにとって必要な要素について考察することとする。

なお、「りあん」では障害者の就労サポートを行う「ばすとらる」が異なる曜日に活動しているが、本稿では、「ばすとらる」は紹介にとどめ、「子どもの居場所づくり」と学生の参画および食の提供を活動内容とする「カコタム」を主題として論述する。

2. 商学連携事業が始まった経緯

この事業を始めるきっかけは、2012年に札幌市が開催する「商店街再生学生アイデアコンテスト」に応募したことである。

アイデアの背景には、「地域における貧困の現状」があり、当時カコタムのボランティアに参加していた3名の学生から、子どもたちの貧困問題の解決のためには「居場所」が必要ではないかとの問題意識に基づく提案があった。ここで言う居場所の意味は二つある。一つは「学習環境としての居場所」である。実際に、ひとり親世帯では一般家庭と比べて世帯所得が相対的に少なく、とくに母子世帯では平均年間所得が223万円と全世帯所得平均の40%である⁵⁾ことから、子どもを塾に通わせることができないなどの教育格差が生じている。二つめに、「食経験ができる居場所」である。

次に、アイデアには商店街を活性化させる要素が必要であった。麻生商店街を選んだ理由としては、次の3点が挙げられる。①札幌市は政令指定都市のうち大阪市に次いで生活保護世帯の割合が高く、中でも麻生商店街が位置する札幌市北区は2010年時点のデータでは生活保護率が35%で、白石区(48%)、東区(43%)に次いで高く、札幌市の生活保護率33%と比較しても、相対的貧困率が高い地域であることが想定されること^{注1)}、②学生が北区に隣接する石狩市のキャンパスに通うにあたり、麻生は乗り継ぎの中継地点であるため身近に感じること、③学生たちがボランティアと

して活動する場合に無償で通いやすい立地であったことである。

以上をアイデアとしてまとめた概略が図1である。

コンテストへの応募の一番の理由は、このようなアイデアを発展させ、将来的に「子どもたちの居場所」を実現するにあたり、その構想をさらに洗練させるため専門家などから意見をもらうことがであった。しかし、提案した「商店街の空き店舗を活用して、地域全体で見守ることのできる子どもたちのための居場所づくり」は高く評価され、準グランプリを受賞した。

賞金^{注2)}を受ける条件としては、①商店街が実際にアイデアを事業化することに合意すること、②年度内にアイデアを具体的なかたちとして開始(プレオープン)すること、の二つであった。コンテストの開催は11月下旬であったため、年度内に実現するためには1、2か月で事業の具体的な設計図を描かなくてはならなかったが、すでに述べたようにこのアイデアは実現可能な状態まで綿密に構造化されたものではなく、年度内にかたちにすることは不可能であると思われた。この取り組みが「誰のために」「なぜ」必要であるかを説明することはできても、「だれが」「どこに」この場所を用意し、そのための資金繰りや運営は「どのように」するのか、また空き店舗が常時シャッターを開け続けるため、子どもたちや大学生がいない時間帯に「だれが」「何を」するのかなど、検討を重ねるべきことが多かったからである。当然、賞金を受け取らず、事業化しないという選択肢もあった。しかし、当時の商店街理事長がこのアイデアへの賛同と実現に向けての前向きな意思を示し、商店街の尽力と筆者の研究室の学生(以下、ゼミ生)のはたらきによって、プレオープンを実現したことで前進することとなった^{注3)}。

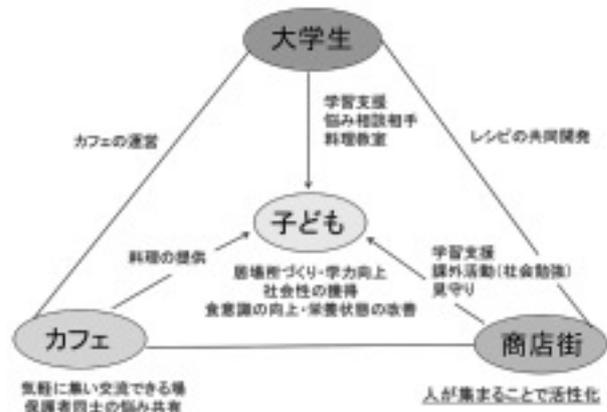


図1 商店街再生の提案シエマ

3. 麻生地域で活動することの意義

麻生商店街が所在する「麻生地域」は地下鉄南北線の終点であり、太平百合が原、拓北・あいの里、屯田、篠路、さらには石狩市など、さまざまな地域と札幌市中心部とをつなぐ中継点として繁栄してきた。まちづくりセンターが設置される地域で分類すると、北区は11の地域に区分することができる(図2)。北区の年齢構成は、札幌全市とほぼ同様であるが、麻生地域は、北海道大学周辺の鉄西、幌北とならび生産年齢人口(15~64歳)が高い地域である。その一方で年少人口、老年人口がそれぞれ少なく、若い単身者が多く暮らしていることが想定される。この10年間で老年人口が5%上昇しており⁹⁾、他の地域と同様高齢化が進んでいることが伺えるものの、地域を支える潜在的な力は大きいと考えられる。

麻生商店街は1973年に設立され、2012年度現在422軒の店舗および事業所が営業している。空き店舗は37軒(8.1%)と、全国的にもシャッターが下りている店舗の少ない比較的元気な商店街と言える¹⁰⁾。自治体や住民からの商店街の地域内における役割への期待が高まっていることはすでに述べたが、麻生商店街ではこのような要望に応えるべく、「災害備品倉庫」の設置や一人暮らしや夫婦世帯の高齢者の暮らしを支援する「高齢者支援応援団事業」など、さまざまな住民サービス事業に力を注いでいる¹⁰⁾。商店街の空き店舗の活用と大学生の若い力を融合させた商店街活性化のための商学連携事業である「りあん」も、商店街の枠組みを超えた地域活性化に向けた取り組みの一つであるが、このように既にさまざまな事業を実現し、複数の成功事例を経験している商店街であったからこそ、実現す

ることができたのも事実である。

地域を超えた人の交流も盛んである。麻生商店街加盟店には飲食業が多く、近隣住民の台所としての機能のほかに、他の地域からも集客できる条件が整っている。前述のように、麻生地域は札幌市の中心部と郊外とをつなぐ中継点であるため、通勤や通学の途中で立ち寄ることのできる立地にあるため、求心性と遠心性双方の人の流れを地域にもたらす。そのため、他の地域との交流や協働、あるいは情報発信の可能性を持つと考えることができる。実際に、「りあん」の活動での中核となる人材は必ずしも麻生地域あるいはその近郊には居住していない。また、後述するカコタムの学習支援のボランティアや学生、子どもたちに関してもむしろ、麻生地域外からこの場所に集まってきているケースが多い。このように人を集めることのできる利便性と、この場所に集う人が得た経験をそれぞれの地域に持ち帰り拡散してもらうことを期待できることが麻生地域でこの活動を行う意義であると考えられる。

4. 学習支援と食の提供

現在「カコタム」と「ばすとらる」の2団体が「りあん」で活動を展開している。詳細について表1に示す。「カコタム」においては学習支援からスタートしたが、合わせて食の提供にも取り組みを拡げている。

これまでに生活保護受給世帯やひとり親家庭の子どもたちを対象とした国語・数学(算数)・理科・社会・英語の主要5科目の学習支援事業を行う団体は全国にみられたが、2013年12月に「生活困窮者自立支援法」が成立したのを契機に、自治体の委託事業として実施するケースが増加した。カコタムの活動が他の団体と異なる特徴としては、上記の主要5科目をサポートする学習面に目を向けた活動(写真1)だけではなく、それを含めた「学び」全般をカバーすることにある。たとえば、自然体験学習や料理教室、英会話教室、仕事

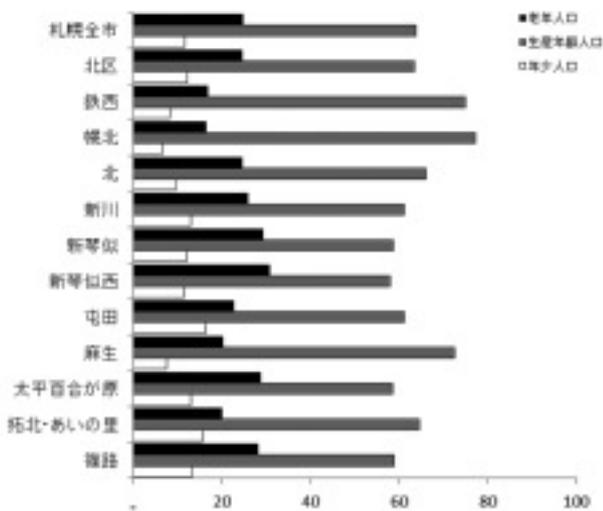


図2 札幌全市・北区・北区内11地域の各年代別人口構成の比較 (平成28年1月現在)



写真1 カコタムの学習支援のようす

表 1 麻生キッチンリあんを拠点とする社会貢献活動

実施団体	NPO 法人 Kacotam (カコタム)	NPO 法人ばすとらる
事業名	へるすたでい	バスまちコーヒー ばすとらる
開催日	毎週水曜日 (17:30~20:30) 毎週土曜日 (10:00~15:00)	毎週月、火曜日 (16:30~18:00)
内容	大学生などのボランティアがひとり親家庭の小・中・高校生を対象に、学習支援を行っている。	障害者の就労支援として、来店客にコーヒーやコンスープなどの飲み物の提供を行っている。

の体験その他子どもの「やりたい気持ち」を実現する取り組みを行っている。学びの積み重ねは人間形成に影響を与える。このことはたとえば、子どもの頃の地域活動や家族行事、家事手伝いや自然体験等の経験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多く、モラルや人間関係に対応する能力が高い¹¹⁾などの報告が裏づけている。しかし、経済的理由や虐待など、子ども自身ではどうすることもできない環境に置かれる場合、このような体験の場を得られないことがある。そのため、すべての子どもたちが環境に左右されず、自己実現に向けて自らの人生を楽しめる社会を目指し、子どもの学びの機会格差問題の解消に取り組むカコタムの活動は大きな意味をもつ¹²⁾。

もう一つの大きな特徴としては、2014年2月から始まった食事の提供である(写真2)。食事は単にお腹を満たすためのものではなく、子どもたちにとっての「学び」の時間でもある。実際に、自主的に配膳や下膳するなど行動面での変化がみられるようになったほか、「食材に触りたい」「食器を洗うのを手伝いたい」「盛り付けてみたい」などの要望が聴かれるようになり、可能な限り手伝ってもらうようにしている。小学校高学年から中学生にかけての年代では「地域活動」「家族行事」「家事手伝い」等が、「体験の力」に関係しており¹³⁾、子どもの成長に合わせた「体験活動」が重要であることが示唆されている。また、「ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと」といった生活体験が豊富な子どもほど、道徳観や正義感が高いとの報告¹³⁾もあり、何気ない日常の体験を積み重ねる機会は重要である。

さらに、子どもたちの共食の機会を増やすことは健康面にとっても重要である。夕食を「一人で食べる」児童では「家族そろって食べる」児童と比較して、「身体のだるさや疲れやすさを感じる」「何もやる気がおこらない」「イライラする」など体調や心理面への影響が報告されている¹⁴⁾。また、大人と一緒に食事をとることは、夕食でごはん、魚、野菜を食べる頻度が有意に高いこと¹⁵⁾や、10代の頃家族と一緒に食事をとる回数が多い子どもほど、成人後の食物摂取状況が良好であること¹⁶⁾など、幼少から思春期にかけての共食経験が、



写真2 子どもたちとボランティアの食事風景

成人後の健康増進や疾病予防の観点からも重要であることが示唆されている。このように、人は自分一人の力で勝手に成長を遂げるのではなく、人との交流を通じてどのような経験を重ねるかによって、その後の心身の健康や人格形成を左右するのである。カコタムは食事提供を学びの重要な要素であると捉え、食材費等の補助を行っており、現在子どもたちは無料、ボランティアは1食につき100円の徴収によって食事提供を行っている。

商店街は店舗全般の管理を行うことで間接的に、子どもたちの学びの支援を可能としている。たとえば食事提供には食材が必要であるが、米や調味料、日用品(洗剤やサランラップなど)を無償で提供し、定期的に補充を行うなどの支援を行っている。これらの支援は経済面だけではなく、食材や備品等を適宜補充するなどの作業時間の負担を軽減することにも繋がっている。商店街からのこのような支援がなくては、この活動を実施することは困難であろう。

5. 大学生の主体的な関わりとサポート体制

カコタムの活動を支えるのは、多くの学生ボランティアである。食事提供や食育に関しては、筆者の研究室に所属する4年生のゼミ生を中心に行っているが、1年生から3年生までの学生もカコタムに所属し、学習支援や土曜日の食事提供の活動を支えてきた。

2012年からの学生のおもな活動については表2に示す。学習支援の際の食事提供における商店街からの支援は前述のとおりであるが、この活動のほかに藤麻人(とまん) ^{註4)} という日替わりシェフ ^{註5)} として、1日20食のランチ提供の店の運営するにあたって、さまざまな支援を受けてきた。ここでは藤麻人とへるすたでの運営全般を通しての商店街から学生への支援について述べることにする。

この3年の間、「藤麻人」と「へるすたでい」合わせて毎週3回の活動を行ってきた。へるすたでいは固定した利用者を対象とした、いわば「家庭」の延長のような活動であるのに対し、藤麻人は提供したランチやサービスに、来店客は相応の対価を支払う「営業」であるため、顧客の満足度向上に努める必要がある。また、日替わりシェフはコミュニティカフェとしての側面を有していることから、日々店主は変わるとは言え、地域交流の拠点としてここに集う来客は商店街にとっての顧客とも言える。学生による活動はメニューを考案したり、イベントの企画などにおける柔軟な発想と体力があるなどのメリットがあるが、学業が優先であ

るため、就職活動や試験期間、あるいは補講などによる時間的制限が多い。また、12～15名のゼミ生が毎回2～3名ずつシフトを組んで運営することなどから、日々の業務の連続性を円滑に申し送ることが難しいなどのデメリットがある。そのため商店街は藤麻人の営業については、サービス面や衛生面等をサポートするスタッフ(以下、サポートスタッフ)を配置しこれらの問題を補っている。サポートスタッフは学生たちに対し、運営に関するさまざまな助言を行うほか、前述の米、調味料、日用品等を、ゼミ生の報告に応じて適宜補充したり、ゼミ生の注意が行き届きにくい清掃や冷蔵庫・冷凍庫の食材チェックを促したり、地域住民や常連客への声掛けなどの対応、商店街との連絡調整等さまざまな支援を行っている。

さらに、毎月1回、サポートスタッフと学生数名が集まり、翌月の提供メニューを決める「メニュー会議」を実施している。会議のなかでは、メニュー開発担当のゼミ生が考案した新メニューと既存の献立を提示し、来店客の多様なニーズを考慮して、食材や味、調理法などの重複がないよう配慮しながら、日々のメ

表2 麻生キッチンりあん事業に関連するこれまでの学生の活動

年度	時期	イベント(事業)名	おもな活動	備考
2012	4月～ 8月 11月	・カコタムの活動開始 ・料理教室の開催 ・札幌市「商店街再生学生アイデアコンテスト」	・学生3名がカコタムに参加 ・火を使わないカンタンレシピを開発しよう！—子どもがひとりでも安全に作れる料理を考え— ・麻生商店街の空き店舗を活用して、地域全体で見守ることのできる「子どもたちのための居場所づくり」を提案。	・場所：エルプラザ
2013	2月 8月～	・藤麻人プレオープン ・藤麻人オープン ・カコタムの学習支援事業開始 ・料理教室の開催	・10日間手づくり弁当の販売 ・一般客に向けたランチの提供：週3回：月、水、土 ・学習支援活動(へるすたでい拠点) ・子どもたちによるレシピの開発、巨大手巻きずしの調理など	※住所：札幌市北区麻生町5丁目1-3 麻生ビル1階 ・場所：藤女子大学花川キャンパス
2014	2月～ 8月	・へるすたでい食事提供 ・藤麻人の営業日変更 ・子どものワンデイシェフ体験	・カコタムに通う子どもたちとボランティアに向けた夕食の提供開始(水曜日) ・週2回(月、火)に変更 ・カコタムを利用する中学3年生(男子)がカコタムお楽しみ会にて料理の提供	・場所：麻生キッチンりあん
2015	2月～ 4月～ 8月	・へるすたでい食事提供に加え食育活動を開始 ・土曜へるすたでい開始 ・料理教室の開催	・夕食時、子どもたちへの食育開始(水曜日) ・へるすたでいにおける食事提供を週1回から週2回に変更(水、土) ・オリジナルカレーづくりに挑戦	※藤麻人の営業は継続 ※調理は：卒業生と2年生が担当 ・場所：藤女子大学花川キャンパス
2016	3月 4月～	・店舗移転 ・へるすたでい食事提供と食育活動の変更 ・藤麻人の営業日変更	・食事提供と食育を週2回に変更(水、土) ・藤麻人の営業を週1回(月のみ)に変更	※札幌市北区北39条西5丁目2-12

ニューの組み立てを行っている。また、会議ではゼミ生から提案されたイベントの企画についても取り上げ、実現可能となるよう、サポートスタッフが助言を加えたうえで商店街に提案するなど、学生による活動の成長を促進する役割も担っている。サポートスタッフのほかにも、商店街の関係者が食事その他の用事で立ち寄ることがある。その際に何か変わったことや困ったことがあれば伝えることができるなど、多くの目で学生の活動を見守る体制がつけられている。

日替わりシェフは曜日によって店主が変わるため、料理や雰囲気に変化が生じ、利用者にとって選択肢が増えるというプラスの側面がある。しかし他の曜日の日替わりシェフが固定したスタッフであるのに対し、ゼミ生は担当する回数が限られてしまうため、顔ぶれが毎回変わってしまうというデメリットがある。札幌市の調査では、コミュニティカフェにどのようなことを期待するかの質問項目に対し、2人に1人が「お店の人との会話」と答え¹⁷⁾、約8割のコミュニティカフェが「店の経営において顧客や地域コミュニティとの交流が必要だと思う」¹⁸⁾と答えている。ゼミ生の営業だけではこのような利用客の目的を果たすことは困難であるが、代わりにサポートスタッフが利用客の顔と名前を覚えて呼びかけをしたり、世間話をするなどの対応をすることで補うことが可能となっている。また、実際に来店する際の一番の目的は「食事のため」¹⁷⁾であることから、快適な環境の中で顧客のニーズに見合った食事を提供することは重要なことであり、サポートスタッフとのメニュー会議の開催が活かされている。

また、「りあん」に特徴的な副次的作用として、他の日替わりシェフとのかかわりから生まれる支援が考えられる。たとえば、水曜日へるすたでいでは17:30に食事提供をするので、16:00には調理を開始しなくては間に合わない。その場合、水曜日の昼の時間帯に日替わりシェフをしている「ひるや」という店の店主が片付けをしている時間帯と重なるが、この短時間のふれあいも重要な意味を持つ。たとえば、機材等の不具合等の申し送りなど情報の伝達や共有、さらには子どもが予定よりも早く来てしまったり、住民から突然の食材支援がある場合などに対応をしてもらうことがある。このようなつながりは、「独立した個店の集まり」がコミュニケーションを促進し、信頼関係や互助意識、絆の形成といったソーシャルキャピタル¹⁹⁾の構築につながっていると考えられる。さらに、日替わりシェフやサポートスタッフを含む商店街の担当者、学生との間で、顧客の現在の状況を報告しあうなどの情報共有も、店の運営を超えて地域のつながりづくりに活か

されていくことが期待される。

6. 社会貢献活動と食支援

ひとり親家庭の母親は、生計を立てるために就労する必要があることから、全世帯の母親と比べ帰宅時間が遅く⁵⁾⁶⁾、子どもと共有できる時間が相対的に少ないことが予想される。

母親と接する時間が少ないと、子どもたちの食経験の機会も少なくなると考えられる。家庭生活の一場面としての「食事」までの工程を考えると、①献立の考案、②食材の購入、③食材の冷蔵庫等への収納、④食材の下処理と調理、⑤盛り付けと配膳、⑥喫食、という一連の流れが想定される。喫食までにより近い段階の作業ほど体験する頻度が高い傾向があり、また食事に関わる手伝いをしている子どもほど食知識が高いことが報告されている⁷⁾が、母親の帰宅時間が遅いことによって(または不在によって)、喫食を除くその他の部分を経験することができない可能性が考えられる。

さらに、健康面におけるリスクもある。実際に、世帯所得600万円以上と比較して200万円未満の世帯では、肥満者の割合(女性)や習慣的な朝食欠食者の割合(男女)、運動習慣のない者の割合(男女)、現在習慣的に喫煙している者の割合(男女)が有意に高い一方、野菜摂取量(男女)は有意に低い⁸⁾との結果がある。子どもの頃の食習慣は成人後の健康に影響し、ひとり親世帯で育った子どもが、成人後に生活習慣病に罹患するリスクを高めること、すなわち健康格差をもたらす要因となることを否定することはできない。

これらのことから、子どもたちには「学習環境」と「食経験」を安心して得ることのできる居場所が必要であり、安心して過ごすためには、「信頼関係を構築することができる大人の存在」、つまり養育者がその役割を果たすことが困難なのであれば、いつも顔を合わせているボランティアや大学生がその役割を担うことができると考えられる。「カコタム」における学生の活動の実績は、社会貢献活動としての有効性を示すものとして評価する必要がある。

7. 多様なつながりの形成に向けて

2016年度からは、「りあん」における商店街の新しい事業として「子ども食堂」が実施される。この新事業と前述のへるすたでいとを関連づけて人と人との絆づくりにとって必要な要素について考察することとする。

すでに述べたように北区は札幌市のなかでも白石

区、東区に次いで生活保護世帯の割合が高い地域である。このような状況をふまえ麻生商店街では2016年5月より、誰でも気軽に立ち寄ることのできる「子ども食堂」を開設することとした。貧困率は母子世帯の子ども、勤労世代の母子世帯、高齢者世代の単身者（女性）の順に高いことから²⁰⁾、カコタムの活動を利用する子どもだけではなく、その他の子どもとその保護者、さらには高齢者など貧困を抱える人たちに目を向けた取り組みを、地域で行うことは重要である。

少子高齢化やライフスタイルの多様化などに伴い、地域を形成する家族構成や人口構造が変化し、居住形態も戸建てから借家やマンション居住への移行などの要因によって、住民と地域社会間の結束が脆弱化してきていることが問題とされている²¹⁾。わが国の平均寿命が延伸した要因の一つとして、ソーシャルキャピタルが密であったことが関連するが¹⁹⁾、最新の政府の健康づくり政策²²⁾においては、家族や地域の絆を再構築し、人々が互いに助け合うことのできる社会の実現を目指し、新たに「地域のつながりの強化（居住地域で互いに助け合っていると思う国民の割合の増加）」が目標項目として掲げられるなど、脆弱な「絆」がおよぼす人々の健康への悪影響を示唆し、その再形成を呼びかけている。

このような地域におけるつながりの構築には、子どもの存在によるところが大きい。Offerら²³⁾は、コミュニティにおける子どもの存在は、ほかの家族からのソーシャルサポートを受けるうえでの「社会的な仲介者」として機能し、地域住民の間を結ぶ媒介として重要な役割を担うと報告している。そのように考えると、「りあん」をつくるきっかけは未熟なアイデアではあったが、子どもたちの問題に目を向けることを通して商店街や学生、市民団体、地域住民など多くの人の関心や支援の力を引き寄せ、そこに集う人と人とのつながりをも構築する効果をもたらした。つまり、「りあん」における人と人との「つながり」をつくる媒介者はやはり、子どもの存在であったと言える。子どもの成長を多くの大人の目で見守り、体験の機会や生活につながる取り組みを地域で継続することは、緩やかではあるが地域の絆づくりを強固にしていくのではないだろうか。そして、子どもたちにとって家庭と学校での生活だけでは経験することの少ない、地域とのつながりをこの場所で日々経験することになるであろう。「りあん」で過ごす日々が、子どもたちの成長後、近隣住民との良好な関係性を持つきっかけになるよう期待しつつ、今後もこの活動を成熟させることが求められる。

8. おわりに

商店街の空き店舗を活用した「子どもの居場所」づくりが、地域づくり、人と人との絆づくりにまで拡がりを見せている。その要因としては、この事業の中心となる商店街が社会貢献活動への支援者としての側面を有すること、また活動を担う大学生の主体的な関わりを支援する側面をもつことで、この活動に関わる人々に多様なつながりを生み出すことにある。このことは、子どもの存在が家族や地域住民をつなぐ役割をもつことから、多くの大人が子どもの問題に目を向け、さまざまな活動を展開することによって生まれた副次的な作用によるものと推察される。前述のように、本活動は多くの事業を成功させてきた比較的空き店舗数の少ない商店街での事例であったが、活性化を模索する商店街に対して手掛かりを与えるものと考えられる。

一方で、支援を必要とする子どもやその家族に、どのように情報を届けるのか、そしてどのようにして足を運んでもらうのかという課題が残されたままである。今後は、地域の町内会や商店街関係者、日替わりシェフや利用客などさまざまな大人が行き交う利点を活かし、情報収集の強化を図る必要がある。そのためにも、わが国の少子高齢化社会を担っていく子どもたちが健全に学び、成育できる環境を整える必要があることを、より多くの人に理解してもらうことが重要であると考えられる。

注

- 1) 2014年現在、札幌市北区の生活保護率は58%で2010年に比べて22%も増加している。
- 2) グランプリは200万円、準グランプリは100万円であった。
- 3) この間に厨房設備が整い、かつ負担の少ない家賃の物件が見つからず、電気店跡の店舗を改装して一から店づくりをすることになった。そのため、初期費用や運転資金を含め、麻生商店街振興組合はコンテストの受賞賞金100万円をはるかに超える資金を負担した。
- 4) 1891年から1957年まで麻生地域には亜麻工場があり、地域を支えてきたことからこの土地に“麻生”という名称がつけられた。この名称にちなんで、本事業に先立つ2009年には子育て支援などの地域交流の場として「café 亜麻人（あまんと）」が活動している。藤女子大学の学生が運営する店であることと、亜麻人の姉妹店としての存在をイメージして「藤麻人（とまんと）」とゼミ生が名付けた。
- 5) 1回ごとの店舗使用料を支払うことで、学生や一

般の主婦や飲食店経験者、将来店を開店したい人などが店の営業をすることができるシステムとして機能することを期待した名称である。

引用文献

- 1) 鈴木隆雄. 商店街とは何か—その形成の歴史と商業政策の変遷. 企業診断ニュース(8)3-7, 2015
- 2) 商店街によるまちづくり宣言. 札幌市商店街振興組合連合会, 2008
- 3) 地域商店街の公共的役割と自治体の支援に関する調査研究報告書. 公益財団法人東京市町村自治調査会, 2013
- 4) 商店街実態調査報告書. 平成 24 年度中小企業庁委託調査事業, 2013
- 5) 全国母子世帯等調査. 厚生労働省, 2011
- 6) 全国家庭児童調査結果. 厚生労働省, 2009
- 7) 佐々ら. 大人と一緒にの食事が子どもの食意識・食態度・食知識に及ぼす影響. 日本家庭科教育学会誌, 46(3)226-233, 2003
- 8) 国民健康栄養調査. 厚生労働省, 2010
- 9) 住民基本台帳人口. 札幌市, 2006, 2016
- 10) あさぶ商店街創立 40 周年記念誌. 麻生商店街振興組合, 2014
- 11) 子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書(概要)—子どもの頃の体験はその後の人生に影響する. 国立青少年教育振興機構, 2010
- 12) 特定非営利活動法人 Kacotam. <http://www.kacotam.com/>
- 13) 生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ —「青少年の [生きる力] をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について」—(中間まとめ). 文部科学省生涯学習審議会, 1999
- 14) 児童生徒の食生活実態調査. 独立行政法人日本スポーツ振興センター, 2010
- 15) Kusano-Tsunoh et al.: Effects of family-togetherness on the food selection by primary and junior high school students family-togetherness means better food. *Tohoku J. Exp. Med.*, 194: 121-127, 2001
- 16) Larson et al.: Family meals during adolescence are associated with higher diet quality and healthful meal patterns during young adulthood. *Journal of the American Dietetic Association*. 109 (9): 1502-10, 2007
- 17) まちづくりとコミュニティ・カフェに関するアンケート調査. 札幌市市民まちづくり局市民自治推進課, 2009
- 18) カフェから始まるコミュニティ—つながる拡がる交流の場. 札幌市市民まちづくり局市民自治推進課, 2015
- 19) イチロー・カワチら. ソーシャルキャピタルと健康, 日本評論社, 2008
- 20) 内閣府男女共同参画局. <http://www.gender.go.jp/>
- 21) 高齢者等が 1 人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議報告書. 厚生労働省, 2008
- 22) 厚生労働省. 健康日本 21(第 2 次), <http://www.mhlw.go.jp/>
- 23) Offer & Schneider: Children's Role in Generating Social Capital, *Social Forces*, 85 (3): 1125-1142, 2007

A study of community activities to build a social bond between individuals

Haruko Kumamoto

(Development of Food Science and Human Nutrition, Faculty of Human Life Sciences, Fuji
Woman's University)

Key words: shopping area, child poverty, single-parent, family meal, community space